

鳳仙花

森岡 正作

刈田跡

飛 火 野 の 畦 に 白 置 く 狐 花
かな かな の 戸 毎 に 触 れ て 灯 点 く
曳 か れ ね ば 手 持 無 沙 汰 の 烏 瓜
「居 り ま す か」「ゐ る よ」と 秋 の 簾 越 し
ジ ー パ ン を 穿 か せ 案 山 子 の 若 作 り
鳳 仙 花 弾 き て 鬱 を 放 ち け り
狐 花 彦 根 に 井 伊 の 赤 備

私の周囲は大体稲刈りも過ぎ、この田んぼも三十センチ程に伸びた穂がわずかな風に揺れている。昭和の時代であったならば、稲を刈った後には天日干しの稲架が一面に組まれていたであろうが、今は稲刈機が稲穂だけを袋に集める。そしてそれを二、三日乾燥機に入れるだけでもう新米となって食べられるのである。

晩年の登四郎先生に（刈田跡人さまよふに似たりけり）という句がある。縄文時代に始まったとされる稲作は、日本人の精神文化の形成に影響を与えたと言われるが、確かに豊年の稲穂を眺めながら歩いてみると、自分の心身も充実して、しっかりと大地を踏みしめているように感じるものである。それ故、刈田となつてしまえば目の前の力強い景もなく、田んぼ自体が重量感を失ったようにで心もとなない。言わば精神的防壁を喪失した身には少しばかりの風も寂しく感ぜられよう。ふと流浪の心、流離の心が頭をもたげるのはこんな時ではなからうか。